

平成 20 年度 学校研究 研究紀要

研究主題

一人ひとりの「ゆたかな学力」を 育む学校づくり

～学習意欲の向上と学習習慣の定着をめざして～



能美市立寺井中学校

能美市立寺井中学校 平成 20 年度 学校研究

《主題》

一人ひとりの「ゆたかな学力」を育む学校づくり ～学習意欲の向上と学習習慣の定着をめざして～

I. 主題設定の理由

学力の向上のためには、学習の主体者である生徒が意欲的に取り組むことが大切であり、その学習の成果をより確実なものとするのが次へのステップにつながると考えた。

そのためには何より、学習の場をつくる教師の指導力の向上と授業の絶え間ない工夫改善が求められる。そしてそれらは適切な評価活動に裏打ちされたものでなくてはならない。

また、自己有用感や自己達成感を伴った豊かな心をあらゆる教育活動の中で育み、生徒が将来に夢や希望をもって主体的に学習に取り組めるような基盤をつくるのが大切である。

そこで「豊かな心」を基盤とした「確かな学力」の向上を願って、研究主題を設定した。

II. 研究の内容

学習意欲の向上と学習習慣の定着といった視点から、生徒一人ひとりの確かな学力を育む学校づくりをめざす。そのためにはまず教師自身の指導力の向上と授業に対する絶え間ない工夫改善が重要であり、授業改善につながる評価や生徒が学習に主体的に取り組めるような基盤をつくるのが大切であると考え、平成 17 年度より 3 年間、研究実践を進めるとともにその成果を発信してきた。

本年度は、昨年度の課題として挙げられた「課題を読みとる力」「考えをまとめ表現する力」「学習内容を活用する力」などに目を向け、新学習指導要領の施行をも視野に入れながら、これまでの研究実践の上に立った研究推進を図るものとする。

《研究組織》

研究推進委員会

A. 確かな学力を培う

1. 3つの視点を軸とした授業改善を図ることで、基礎的な知識・技能の習得と思考・判断・表現の力の育成を通して、さまざまな課題に積極的に対応し、解決する力を伸ばす。
2. 学力調査や学習意識調査などの追跡を通して学習意欲や学力の定着を検証し、その結果を次の指導に活かすことで、確かな学力の一層の定着を図る。

B. 豊かな心を育む

3. 特別活動をはじめとするすべての教育活動を通して、自己有用感、自己達成感のある豊かな心を育て、さらなる学習の基盤づくりを進める。

教科部会：

国語、社会、数学、理科、音楽、美術
保健体育、技術・家庭、英語 の各部会

各学年会 および 生徒会指導部会、
特別活動、道徳、総合的な学習の各部会

《全体構想図》

研究主題

一人ひとりの「ゆたかな学力」を育む学校づくり

～学習意欲の向上と学習習慣の定着をめざして～



Ⅲ. 研究実践

A. 確かな学力を培うための取り組み

1. 「授業改善のための3つの視点」に基づく授業改善
(学期ごとの中間評価と改善：P D C Aサイクルの確立)
2. 「授業力向上実践システム」による実践研修
3. 「学力調査・学習意識調査」を利用した実践の検証
4. 外部講師による指導助言
5. 生徒・保護者等への啓発（学校だより、各学年の取り組み等）

B. 豊かな心を育むための取り組み

1. 「心のテーマ」を軸とした道徳・特別活動等の実践（ボランティア体験活動など）
2. 道徳・学級活動における実践研修

《研究の3つの柱と方針》

1. 授業の工夫改善

- ◇ 「新・授業改善のための3つの視点」を中軸に据えて **授業改善** を図る。
 - ① 課題をよく把握し、理解し、読解する力の育成
 - ② 思考・判断・表現の力の育成
 - ③ 関心・意欲を高めるための言葉かけ等の工夫
- ◇ 「授業力向上実践システム」の継続実施を通してさらなる **授業力の向上** を図る。

2. 指導と評価

- ◇ 学力調査や学習意識調査などの分析・評価に基づいて指導のさらなる改善を図る。
 - ・ 基礎的な知識・技能の習熟の徹底を図る。
 - ・ 少人数授業の持ち方の工夫・改善を図る。
 - ・ 保護者への啓発活動を進める中で、家庭での学習習慣や生活習慣の改善を図る。

3. 学習意欲の向上

- ◇ 特別活動・道徳・総合的な学習の各領域の機能のさらなる活性化を図る。
 - ・ 「心のテーマ」と諸活動との有機的な結びつけによって、自己有用感、自己達成感のある豊かな心を育て、さらなる学習の基盤づくりを進める。

A. 確かな学力を培うための取り組み

1. 「授業改善のための3つの視点」に基づく授業改善

確かな学力を培っていく上で、教科の枠を超えた共通の視点をもつことは、学校全体が一つの方向に足並みを揃えていくために重要なことである。

これまで3年間の研究成果を踏まえ、今年度は次の3つの視点を掲げて授業改善に取り組んできた。

《授業改善のための3つの視点》

- ① 課題をよく把握し、理解し、読解する力の育成
- ② 思考・判断・表現の力の育成
- ③ 関心・意欲を高めるための言葉かけ等の工夫

- ① 「課題をよく把握し、理解し、読解する力の育成」は、毎日の授業の中で、生徒がその時間の課題やねらいをしっかりと理解し把握するように要点をしっかりと押さえたり、興味・関心が高まるように課題を工夫したりすることを大切にしていこうと、設定されたものである。

今年度は特に「把握」を明記し、課題の工夫が教師の独り善がりにならないよう、それが生徒に十分に把握されたかにまで責任を持とうという思いが込められている。

- ② 「思考・判断・表現の力の育成」は、授業の中で生徒が自分で考えたり、その考えをまとめたり、発表したり、ほかの人の考えを聞いてさらに自分の考えを深めたりすることを通して、それらの力を高めると同時に、これまで培った基礎的・基本的事項を活用していく力を伸ばしていこうとするものである。



- ③ 「関心・意欲を高めるための言葉かけ等の工夫」とは、生徒の活動や発言に対してしっかりと価値づけるような言葉かけをおこない、生徒に自信をもたせ、意欲を高めていこうとするものである。

《学期ごとの中間評価と改善：P D C Aサイクルの確立》

今年度、年度当初に立てた「学力向上に向けた授業改善の方策」に基づいて各教科でとりこんできた研究実践を、一学期末・二学期末に振り返り、その時点までの成果を確認するとともに、課題に対して対策を講じてきた。また、それを冊子にまとめて全員で読み合わせることで、教科を超えて共通している新たな課題も発見されてきた。

2. 「授業力向上実践システム」による実践研修

昨年度までに続き、教材研究・学習指導案作成のあと、3グループに分かれて教員同士で「模擬授業」をおこない、「3つの視点」に沿って、生徒の視点から指導案を再検討した。

また、そこで改良された指導案でおこなわれる授業を参観し、生徒の活動を見取ることで、教師の発問や説明などが生徒にどのように伝わっているかも検証してきた。



この「指導案検討⇒模擬授業⇒検討会⇒研究授業⇒授業検討会」という一連の流れ（授業力向上実践システム）による授業研究は、本校の授業研究のひとつの特徴でもあり、教科専門の違った者同士が様々な視点で話し合う場を通して、教科が違って変わらない部分が見え、成果を感じている。

また、若手教師とベテラン教師とがひとつの授業について話し合う研鑽の場としても、大変有意義であると捉えている。

- 質問の意味がうまく理解できなかったとき、とても焦ってしまった。
- 先生に○をつけてもらったり褒められたりすると（大人でも）すごくうれしかった。
- 先生の柔らかな表情や言葉かけひとつで、ずいぶん気持ちがリラックスできた。…

3. 「学力調査・学習意識調査」を利用した研究実践の検証

全国学力調査・石川県基礎学力調査などをもって、指導内容の定着の度合いなどを検証し、各教科の「学力向上に向けた授業改善の方策」に掲げられた重点目標や具体的な方策など、その指導法について改善を加えている。

以下のような力の充実は、昨年度、多くの教科に共通して挙げられた課題であり、今年度は全教科において、特にこれらの改善に力を注いできた。

- * 目的に沿って注意深く聞き取ったり読み取ったりする力。条件や関係を把握する力。
- * 目的に沿って筋道を立てて考える力。考えを振り返って評価・改善していく力。
- * 自分の考えを筋道を立てて表現する力。伝えたい内容を正しく書く力。
- * それらの基盤となる基礎的・基本的事項の定着。

また、全国学習意識調査のほかに本校独自の「学習意識調査」を実施し、生徒の学びの様子をつかむとともに、授業改善の取り組みを検証している。この調査も、その時々で質問項目の部分改訂などがあるものの、平成16年からの積み上げがある本校の特徴のひとつである。

4. 外部講師による指導助言

今年度も、金沢大学の松原道男教授に研究アドバイザーを依頼し、本校の研究を客観的な視点から見つめ、これまでの本校の研究の経緯も踏まえた上で、適切な指導助言をいただいた。

今年は「授業研究強化週間」の中の11月13日に、模擬授業を経ておこなった研究授業を見ていただくと同時に、その後の授業整理会で具体的な指導をお願いした。



また、その前日に行われたNOMIりんぐ研修会での講演内容も踏まえつつ、活用力を高めるためのヒントとして、生徒同士の学び合いの導入とその価値や留意すべき事項、評価活動につながる課題設定の方法など、豊富な実践例の中から具体的に指導していただいた。

5. 生徒・保護者等への啓発

生徒や保護者に対して、本校の学力向上への取り組みや生徒の学習に向かう様子などをすべての保護者に配布される「学校だより」や学校ホームページ等で紹介したり、学年懇談会などで話題として取り上げたりして、啓発を進めた。

B. 豊かな心を育むための取り組み

1. 「心のテーマ」を軸とした道徳・特別活動等の実践

今年度は、校務分掌の中に新たに「道徳部会」「特別活動部会」として位置づけ、道徳教育全般・特別活動全般について推進の核として機能するよう改編した。

さらにそれぞれがより効果的に機能し合えるように、「心のテーマ」を軸として相互の関連を図ってきた。

とりわけ特別活動においては、自分の将来に目標や夢を持つことで自分の将来を肯定的に捉え、学習への意欲を高めることができるような系統的な進路学習プログラムや、役割と責任を持たせ「自己達成感」や「自己有用感」を味わわせるボランティア体験をはじめとする体験活動など、これまでの研究実践の中で作り上げてきたものが教育活動の中に定着してきている。

2. 道徳・学級活動における実践研修

10月の指導主事要請訪問にあわせて、道徳・学級活動の研究実践期間を設け、共通の題材について指導案を検討したり授業交流で意見交換をしたりして、学年単位で研鑽を深めてきた。

1年分科会（道徳）では、中心発問について特に活発な意見交換がなされた。

2年分科会（学活）では、人間関係づくりを題材に、アサーションについてグループエンカウンター的手法を取り入れながら研修を深めた。

3年分科会（道徳）では、主題の捉え方について協議を深め、どのような価値を大切にするかによって授業展開が変わること、その価値に迫るにはどのような発問、どのような展開が望ましいのかなどについて、活発な話し合いがなされた。

IV. 研究の成果と課題

《今年度の成果》

1. 「授業改善のための3つの視点」に基づく授業改善について

①【共通の視点で】 教科の壁を超えてすべての教科で同じ方向に向かったことで、それぞれの取り組みが学力向上に効果的に機能していると同時に、教職員の中により一層の一体感が生まれている。また、教科の特性とともに、どの教科にも共通した本質的な部分においても、授業改善が意識しておこなわれた。

②【生徒の視点で】 課題の把握、読解する力を視点に入れたことで、模擬授業の実践も含めて、より一層生徒の視点に立った授業改善がおこなわれるようになった。

③【活用力の向上】 思考・判断・表現の場を、活用力を高めるためのひとつの方策として捉えなおすことで、思考・判断・表現の力そのものを伸ばすと同時に、学んだものを活用する力を育て、学んだ力をより確かなものにしていく学習活動の意義が明確になった。

④【ペア学習等の導入】 思考・判断・表現の機会を多くするために、ペア学習やグループ学習、発表ボードの活用などを授業に積極的に取り入れるようになってきた。



- ⑤【教師の言葉かけ】 授業公開や模擬授業などを通して、授業の中での生徒への「認め・ほめ・励ます」教師の言葉かけが、昨年度にも増して浸透してきた。それは、例えば生徒の学びを大切に授業に生かしていこうとするように、生徒の活動と寄り添いながら生徒の内面の変化や成長を捉え、成就感や達成感を高めていくような力が、教師の中に育ってきた証しでもある。その結果として、生徒の中にも安心感が生まれ、自信につながってきている。
- ⑥【PDCAサイクル】 年度当初に立てた「学力向上に向けた授業改善の方策」を定期的に見直す体制が定着してきた。これによって、成果の上がっているところ、まだ形として表れていないところ、改善しなければならないところなどが明確になり、授業改善が促進された。また、これを冊子にして各教科の実践や成果、課題や改善点を全職員で読み合わせることで、他教科の取り組みに学んだり、共通の課題に気づいたりすることができた。

2. 「授業力向上実践システム」による実践研究について

- ⑦【本質に迫る】 教科専門の違った者同士が様々な視点で話し合うことで、教科が違っても変わらない本質的な部分も意識されてきた。また、若手教師とベテラン教師とがひとつの授業についてじっくり話し合う機会となることから、研修の場が相互により刺激となっている。

3. 「学習調査・学習意識調査」を利用した実践の検証について

- ⑧【検証体制】 これまでのデータの積み上げもあり、全国や県全体との傾向比較とともに校内での経年比較を通して研究実践を検証していく体制が定着してきた。
- ⑨【学力の定着】 学力調査では、概して全国平均値、石川県の平均値を上回る良い結果が出ている。
- ⑩【授業改善の成果】 学習意識調査では、下の表のように、「授業改善のための3つの視点」に基づく各教科の取り組みが生徒にも認識され、成果が上がっていることがわかる。

質 問		H18	H19	H20
○「授業はわかりやすい」と感じている生徒が多い。				
1	授業のめあて(ねらい)はつかんでいる。	57	61	74
2	授業にはやってみたいと感じる課題が多い。	41	49	54
3	授業の中に考える場面や発表する場面がある。	70	75	82
4	授業での先生の説明やアドバイスはわかりやすい。	75	76	83
5	先生はやる気の出るような言葉をかけてくれる。	51	56	63
6	先生は授業で困っているときに支援してくれる。	73	75	81
○あきらめないで最後まで考える生徒が多い。				
7	記述式で理由を考える問題も空欄にせず答える。	60	44	71
8	難しい課題や問題でもあきらめずに取り組む。	59	69	69

(数字はすべて%で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である。)

4. 外部講師による指導助言について

⑪【客観的な助言】 客観的に見た本校の研究の成果や課題、活用力の捉え方やそれを高めるヒントなどを指導していただき、その後の研究実践への貴重な助言となっている。本校の研究を客観的な視点から見つめ直したり、新たな視点を持ったり、教育に関する新しい情報を得たりすることができるため、次年度以降も積極的に研修の機会を持っていきたい。

◇教職員対象の事後評価においては、以下のような数値(%)が出ている。(上段 H20/下段 H19)

質 問		はい	ほぼ	やや	不十分
《研究推進体制》					
1	本校の研究について理解し、積極的に関わってきましたか。	19 28	75 66	6 6	0 0
2	教科部会は充実していましたか。	38 25	53 63	9 13	0 0
《3つの視点による授業改善》					
3	3つの視点を生かして積極的に授業改善に努めましたか。	27 33	63 60	10 7	0 0
《「授業力向上実践システム」による実践研修》					
4	「授業改善向上実践システム」は授業力向上に効果的でしたか。	25 34	66 66	9 0	0 0
《評価の活用》					
5	評価結果を授業や指導に積極的に生かすよう努めてきましたか。	19 29	65 58	16 13	0 0

※各項目において概ね望ましい結果が出ているが、今後、以下のような点に留意して研究実践を進めていく必要がある。

- ・他教科との部会交流を進めることで、互いに得るものも多いと期待される。
- ・折に触れ、原点に立ち返って共通理解を深めることが大切である。
- ・評価結果の活用の際して、方策とそれに対する見取りが一体となった形で提示していくことで、結果が目に見えやすくなり一層の効果が期待される。



学び合いのある授業



活発なコミュニケーション



少人数授業の工夫



付箋紙で授業整理

B. 豊かな心を育むための取り組み

1. 「心のテーマ」を軸とした道徳・特別活動等の実践

- ⑫【心のテーマ・相互関連表の作成】 個々の実践はそれぞれに充実しており効果を挙げているが、それらが同じベクトルでひとつの方向に向かっていくものであれば、より一層の成果が期待できる。しかしながら、中間評価の段階では依然としてそれらの結びつきは十分とはいえなかった。そこで、心のテーマと道徳・特別活動・総合的な学習および各教科の関連を「道徳教育全体計画」の中にもまとめあげた。



2. 道徳・学級活動における実践研修

- ⑬【共通教材による実践交流】 道徳・学級活動においては、各部会が中心となって、年間計画に基づいた教材をねらいや留意事項などとともに毎月提示してきた。また、学年間で各学級の取り組みを紹介し合ったり、他学年の取り組みを交流し合ったりと、学校全体で寺井中を良くしていこうという雰囲気を感じられ、それがまた生徒にも良い影響を与えていると思われる。

◇教職員対象の事後評価においては、以下のような数値(%)が出ている。(上段 H20/下段 H19)

質 問		はい	ほぼ	やや	不十分
《道徳・学級活動における共通教材による実践》					
1	道徳で、共通教材を授業実践することは、成果がありましたか。	62 48	38 48	0 3	0 0
2	学活で、共通教材を授業実践することは、成果がありましたか。	41 45	59 52	0 3	0 0
《心のテーマ、ボランティア体験》					
3	「心のテーマ」と連動した生徒会活動は、活発におこなうことができましたか。	13 14	69 54	16 31	3 0
4	ボランティア体験活動の趣旨を理解し、積極的に推進してきましたか。	16 29	50 50	31 21	3 0

※道徳・学級活動における共通教材による実践については、非常に高い数値が出ており、各教職員の意欲が強く感じられる結果となった。

※一方で、「心のテーマ」との連動については、関連表をもとに、今後さらに系統だった実践が期待される。また、体育祭や文化祭、入学式などの行事において、一人一役の活動を取り入れて達成感・有用感を味わえるよう改善されてきたが、ボランティア体験については教職員の意識にややばらつきが見られる。折に触れ、原点に立ち返って共通理解を深めることが大切である。

《次年度への課題》

- ①【評価につながる課題設定】 教師・生徒の双方に授業のねらいがより明確になるように、課題・考察・結論が一連のつながりとなるような課題の与え方に留意する。例えば、「〇〇してみよう」ではなく「〇〇ができるようにしよう」であれば、それを解決するための考察からできたかできなかったかの評価まで一貫していて明確である。これはまた、生徒自身の自己評価を促進することとなり、学習意欲の向上にもつながると思われる。
- ②【学び合い】 学んだものをより確かなものにし、学んだものを活用していく力を高めるためには、生徒同士の学び合いの活動が、今後より一層重要になってくる。学び合いのねらいを明確にした上で、その進め方の指導も含めて、今後に研究の余地がある。
- ③【発言、家庭学習】 学習意識調査などから、以下のような課題が浮き彫りになってきた。
- ア) 個人としてはたいへん粘り強く考えようとしているものの、みんなの前で発言したり発表したりすることには、やや消極的である。
- イ) 家庭学習（宿題・復習・予習など）の時間が、まだ少ない。
また、勉強する人としらない人の2極化が危惧される。

質 問		H18	H19	H20																								
○発言は苦手と考えている生徒が多い。																												
1	授業中、進んで発言したり質問したりする。	29	31	32																								
2	自分の考えを発表したり話し合ったりする授業は好き。	—	—	33																								
○家庭学習の時間が少ない。																												
3	平日の家庭学習時間（学習塾なども含む）	<table border="1"> <thead> <tr> <th>＼時間</th> <th>ほぼ0</th> <th>～1</th> <th>1～2</th> <th>2～3</th> <th>3～</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>2</td> <td>33</td> <td>46</td> <td>16</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>8</td> <td>50</td> <td>32</td> <td>9</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>11</td> <td>24</td> <td>22</td> <td>30</td> <td>13</td> </tr> </tbody> </table>			＼時間	ほぼ0	～1	1～2	2～3	3～	1年	2	33	46	16	3	2年	8	50	32	9	1	3年	11	24	22	30	13
＼時間	ほぼ0	～1	1～2	2～3	3～																							
1年	2	33	46	16	3																							
2年	8	50	32	9	1																							
3年	11	24	22	30	13																							
(11月実施)																												

(数字はすべて%で、項目1・2は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である。)

ア) に関しては、学び合いの活動とも絡んで、そのルールの指導と同時に、生徒一人ひとりに自信を持たせていく工夫が求められる。

イ) に関しては、望ましい生活習慣の確立も含めて、生徒個々の実態に応じた支援策を講じていく必要がある。また、保護者への啓発活動をさらに充実させつつ、家庭と協力していく体制を作る必要があろう。

- ④【共通理解の必要性】 平成20年度は、過去3年間の取り組みの成果を風化させず、さらに発展継承していくことを第一義に捉え、内容を精選して取り組みやすい「寺井中スタイル」を確立することに力を注いできた。

一方で、教職員の異動や実践の中核となる部署の変更などもあり、当初のねらいがあやふやになり形骸化してしまう危険性も同時にはらんでいる。折に触れ、原点に立ち返って共通理解を深めることが、今後一層大切になってくる。

◇本年度の研究のおもな歩み

月	全体の流れ	会合名	おもな内容
4	P 研究プランの作成 P 研究の方針の確認 * 学力調査 21~22	研究推進会議 ◎全体研修会	・研究方針の確認
5	P 学力向上プランの確認 P 教科の具体案作成 * 計画訪問(各教科)29	研究推進会議 ◎全体研修会 14 ◇教科部会 14 ◎全体研修会	・「H20 年度学力向上プラン」についての検討と確認 ・「各教科における学力向上に向けた授業改善の方策」策定 ・指導案作成・検討 ・本校の研究及び教育活動について指導助言を請う。
6	D 教科の実践	研究推進会議 ◇教科部会	・県基礎学力調査(社理英)の分析および対策の検討
7	CA 全国学力調査の分析	研究推進会議 ◇教科部会	・全国学力調査(国数)の分析および対策の検討
8	CA 一学期の評価と修正	研究推進会議 ◎全体研修会 28 ◇教科部会 28	・「学力調査の分析とその対策」策定 ・エンカウンター学習会 ・新教育課程の概要についての講習会 ・「学力向上に向けた授業改善の方策」および「学力調査の分析とその対策」についての一学期の実践と成果の確認、残された課題とその対策の検討
9	D 教科の実践 * 管内「きめ細かな指導推進会議」 実践発表(数学・英語) 17	研究推進会議 ◎全体研修会 25 ◇道徳・特活部会	・「学力調査の分析とその対策」の共通理解 ・課題の確認と研修テーマの策定
10	* 要請訪問(道徳・特活)7	◇学年部会 研究推進会議 ◇教科部会	・学年会による授業検討・実践・改良→指導案作成 ・指導案検討→指導案作成
11	* 学習意識調査 11 ≪授業研究強化週間 13~18≫ D 模擬授業→授業検討会 13 * 管内道徳講習会研究授業 14 * NOMI りんぐ研修会参加 17 D 研究授業→授業整理会 18	◇3 分科会にて ◎辰口中にて研修 ◇3 分科会にて ◎全体研修会 18 研究推進会議	(教師の働きかけが生徒にどのように伝わるのか検証する) ・活用力の向上について全員が研修する。 (教師の思いと生徒の実際の反応の違いを検証する) ・活用力向上支援アドバイザー(本校研究アドバイザー)の金沢大学教授 松原道男氏を招き、指導助言を請う。 ・学習意識調査の分析、成果の確認と課題に対する対策
12	D 教科の実践	◎全体研修会 17	・学習意識調査からみる成果と課題に対する対策の確認 ・これまでの研究実践の評価
1	CA 二学期の評価と修正 6~7 D 教科の実践 C H20 年度の研究の総括	◇教科部会 研究推進会議 ◎全体研修会 26	・「学力向上に向けた授業改善の方策」、「学力調査の分析とその対策」、「学習意識調査からみる課題への対策」について、これまでの実践と成果の確認、残された課題とその対策の検討 ・H20 年度の研究の総括
2	* 研究成果の発信	研究推進会議	・成果の発信(研究紀要、HP など)
3	P 次年度に向けて	研究推進会議 ◇教科部会 6 ◎全体研修会	・三学期の実践成果の確認および課題とその対策の検討 ・今年度の課題を踏まえ、次年度の方針を策定・検討する。